

神谷大樹先生の「通しをもち、筋道を立てて考え、表現できる子供の育成～5年「面積」～」について

愛知教育大学 高井 吾朗

まず、神谷先生のテーマは、題目にもあるとおり、見通しをもち、筋道を立てて考え、表現できる児童の育成であり、最終的には自分の考えをもつことである。そして、そのための方法としてグループ学習を取り入れることを提案している。

最近、グループ学習を取り入れる先生は多いと思う。しかし、神谷先生も最後に書かれているが、グループ学習は目的ではなく手段でなくてはいけない。つまり、何のためにグループ学習を行うのかということが明確になっていないと、普通に授業をしたほうがよい結果になることもありえるということである。例えば、普段から何気なくグループ学習を取り入れて授業をした結果、グループの中で教える子と教えられる子が固定されてしまい、受身になる子が増えるということが考えられる。

このように、グループ学習には良い面もあれば悪い面もあることに注意しなければならない。では、神谷先生の使い方はどうかというと、見通しをもつ段階においてグループ学習を取り入れている。その理由としては、見通しをもてない児童が個人解決において手が止まってしまう、ということも挙げている。このようなグループ学習の使い方は適切であると言える。問題解決の過程を、問題を理解し、計画を立て、実行し、反省するというものと見れば、問題を理解し、計画を立てることができなければ、何をしてよいかわからず手が止まってしまう。故に、その段階をグループ学習において、自分だけでなく他者の意見を聞くことで、最低限の理解と計画を立てることができ、実行段階を個人解決することができるようになる。

神谷先生の授業では、この授業スタイルを継続することで、単元の後半ではほとんどの児童が考え方の見通しをもてるようになったとある。これは、単元が面積ということもあり、「これまで使った公式を使える図形に、求めたい図形を変形すればよい」という課題に対するメタ認知的知識が機能していった結果であると考えられる。故に、この良い流れをさらによくするために、反省の部分に力を入れてもらいたい。具体的には、見通しをもつ段階において、どのような考え方をしたのかを、授業の最後に話し合うことで、「見通しをもつときに、既習内容を確認するとよい」などの一般的な算数についてのメタ認知的知識を蓄積することが可能になったり、「見通しをもつということは、どういう活動をするのかなのか」という算数を越えた問題解決のストラテジーの獲得にも繋がったりするであろう。こうした取り組みを通して、最終的には、自分で見通しをもつことができるようになることを願いたい。

これからも神谷先生には、グループ学習だけでなく、様々な方法を用いて、自分の考えを持つ児童の育成を研究していただき、よりよい実践研究を報告してもらえることを期待したい。